

Title	徳永里砂君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.131(453)- 136(458)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙報

徳永里砂君提出学位請求論文審査要旨

論文題名 *A Study of Pre-Islamic Rock Inscriptions of the Bir Him a Region, Southwest Saudi Arabia* (サウディ・アラビア南西部ビル・ヒマー地域の古代岩壁碑文研究)

内容の要旨

古代オリエント史の二大中心地はメソポタミアとエジプトであり、それらの二地域では早くから国家が成立し、法律などの社会制度や建築・美術、宗教が発達し、文字の発明を通してその実態が後世に伝えられてきた。また、アナトリアやシリア・パレスチナでも、これら先進文明の影響下で独自の文明が営まれた。

このようにして、古代オリエントでは世界に先がけて高度な社会生活が成立し、その伝統は後世に伝えられたのであったが、アラビア半島だけは古代オリエント文明の生長・発達の外に置かれていた。そこはメソポタミアやシリア・パレスチナと地続きであり、エジプトとは紅海のような狭い海によって隔てられているに過ぎないので、これらの古典的文明の影響下に古代文明の一中心地となっても不思議でなかったと思われるが、実際には香料の産地としてのみ存在理由があったようである。このことは、後にイスラームが発生したことを考えても、不可解なことである。

しかし、いずれにしても、アラビア半島は古代オリエント世界の典型的な後進地帯であったということができ、その地の歴史や文化に対する研究も、後述するとおり、後進的であった。この地は古代ギリシャの歴史家ヘロドトスによっても言及されているが、現地調査はようやく二十世紀中葉に至って散見されるようになり、それも時折欧米の研究者が足を踏み入れたに過ぎないのである。

従って、古代アラビアはオリエント史上いまだ未開拓の分野であり、その地域の研究は現在も多くの困難を伴うものと言わなくてはならない。徳永君は敢えてそのような研究状況に参入し、アラビア半島の中心的国家サウディ・アラビアの一地域に残された多数の碑文を採取・解読し、同地の一民族サムード人の活動とその文化を明らかにしたのである。

徳永君の論文「サウディ・アラビア王国南西部ビル・ヒマー地域の古代岩壁碑文研究」は、二〇〇二年の二月から三月にかけての实地調査で記録した岩壁碑文に関して、独自の文字の分析法によって、解読を行ったものである。全体は二冊から成っており、第一部はサムード文字の統計的分析と年代考察を中心とする基礎的研究であり、第二部は碑文集(資料集)である。第一部は英文で全一二一頁の本文から成り、それに二二の付表と三〇の図版が加えられている。全体は次のような構成をとっている。

第一部 ビール・ヒマー地域の古代岩壁碑文研究

I 序論

A アラビア半島の古代岩壁碑文

B ビイル・ヒマー地域の岩壁碑文調査・研究史  
C ビイル・ヒマー地域における二〇〇二年の岩壁碑文調査

D 本研究で扱う史料について

II ビイル・ヒマー地域古代岩壁碑文の文字研究

A 文字の分類

B 主要なサムード文字の抽出

C サムード文字の文字間の相関性

D 古代アラビア文字との字形の比較

III ビイル・ヒマー地域に見られる主要な文字組み合わせの年代的考察

A 複数の碑文が刻まれた岩壁面の考察

B サムード文字碑文における異種のMの併用について

C 主要なサムード文字組み合わせのおおよその年代

IV ビイル・ヒマー地域の岩壁碑文の文章研究

A 幾つかの文法的特色

1 綴り字の方法

2 語尾のmと冠詞の用法

3 固有名詞

4 動詞

5 前置詞

B 注目すべき成句の研究

1 w d dを含む成句

a w d dを含む文章の分類

b w d dを含む碑文に用いられる文字

c w d dの解釈

2 w r bを含む成句

a w r bを含む文章の分類

b w r bを含む碑文に見られる文字

c w r bの解釈

3 w q rを含む成句

a w q rを含む文章の分類

b y q rを含む文章の分類

c t q rを含む文章の分類

d w q rを含む碑文に用いられる文字

e w q rと岩壁美術との関係

f w q rの解釈

V 結論

A 結び

B 付論

第二部は、徳永君が現地で採取・研究した碑文のうち、一二の碑文集積地から集められた諸碑文のカタログである。それらは一一一頁から成り、更にカラー写真による碑文の図版が付されている。各碑文には番号が打たれ、その転写、ローマ字音訳、英訳、訳注が記されている。

これらの碑文は、上述のとおりサウディ・アラビア王国ナジユラーンの北方約八〇キロメートルに位置するビイル・ヒマーから検出されたものである。この地域は、南アラビアからペルシア湾岸方面及びシリア・パレスチナ方面に至る古代アラビアの陸上交通路の要衝であったと考えられ、紀元前一千年前後から紀元後七世紀前後に用いられていた古代アラビア文字、サムード文字による碑文が密集している。しかし、サムード文字碑

文の文面は非常に簡素な上、年号を伴うものが存在しないため、通常の方法によつては史料としての活用が難しかった。この地域でこれまで行われた碑文調査によつても、文字や書体などの基礎的な研究さえも十分に成されてはいない。

そのような現状を踏まえて、徳永君は文字・書体の分類、岩壁面で碑文の刻まれた順序の観察から、サムード文字碑文の主要な書体及びそれらの相対年代を解明している。また徳永君は、碑文の文面に関してもこの地域独自の言語表現や構文が存在することを明らかにし、ビル・ヒマー地域のサムード文字岩壁碑文は他地域のサムード文字碑文と異なる特徴を持つている可能性を示した。今後、調査地を少しずつ拡大していくことにより、この特徴を持つサムード文字碑文の分布があきらかになると思われる。

#### 論文審査の要旨

上述のように、本論文はサウディ・アラビア王国南西部ビル・ヒマー地域における実地踏査で得られた古代岩壁碑文について、文字を中心とした考察を行ったものである。

第一章（序論）では、古代アラビア半島碑文の概要、ビル・ヒマー地域における先行調査・研究、同地における徳永君自身の調査の概要について述べられている。

著者が取り上げたサムード文字碑文は概して非常に簡素で、年号を伴わないため、史料としての活用が困難であった。しかし、夥しい数の砂漠の岩壁碑文は、多くの原住民がこの地を通過したことを実証する貴重な史料である。また、この地域は古代アラビアの陸上交通路の分岐点であり、オリエントでも有数

の岩壁碑文密集地である。

それらの碑文に対する調査研究は、一九三〇年代のS・J・フィルビーの滞在に始まり、ファン・デン・ブランデン、G・リックマンズ、J・リックマンズ、A・ジャムによつて継続され、近年では一九九〇年に現地地の考古博物館長による包括的な調査が行われているが、大半の史料は未刊行である。別言すれば、冒頭で述べたように、ここは古代オリエント史研究の後進地帯であり、徳永君の新しい方法論に基づく碑文研究は、一つの明確な道を拓くものであると言えよう。

この地域に見られる古代碑文は古代南アラビア文字及びサムード文字によるものである。前者は紀元前二千年紀末に南アラビアで使用されるようになったもので、前八世紀には均整のとれた幾何学的書体が確立し、その使用はイスラーム時代初期に至るまで続いた。他方ビル・ヒマー地域で見られるサムード文字には複数の書体が混在しているものの、暫定的に南サムード文字と呼ばれている。

本論文では、二〇〇二年に調査した九八の碑文所在地の中から一二の主要な碑文集中地点を選び、更に残存状態の良好な碑文一四一六点が考察対象とされている。これらのうち、一〇九九点サムード文字碑文、三一七点古代南アラビア文字碑文である。

第二章においては、これらの碑文を解明するための徳永君独自の方法が開発され、実行に移されている。すなわち、主要なサムード文字の分類・抽出、文字組み合わせの確認である。

まず、一四一六点のサムード文字碑文・古代南アラビア文字碑文の文字分類表が作成された。その際、二度以上出現する文

字を一つの文字とみなし、想定される音価順に配列して、文字番号をつけた。

一〇九九点のサムード文字碑文についてこのような分類を行った結果、二八ないし二九の音価に対して、合計一二の文字が使われていることが明らかとなったことは注目に値する。

とりわけ、他の音価に比べて出現頻度の高いmに関して、大別して一〇種の文字の存在が確認された。このことから、この地域で用いられているサムード文字碑文における複数の文字種の存在が想定されたので、中でも主要な文字を明らかにするために、各文字が幾つの碑文で用いられているかを調べ、同一音価内で比較が行われた。その結果、大部分の音価では特定の一文字の使用頻度が高いことが判明した。これに対して、<sup>sc</sup>の文字に着目してみると、形態の著しく異なる三文字が、それぞれ高い頻度で用いられている。

次には、この<sup>sc</sup>と文字種、例数ともに多いmがどのような組み合わせで用いられているかが調べられたが、これは徳永君独自の着眼である。その結果、両者の組み合わせは六種、すなわちM1・<sup>sc</sup>1、M1・<sup>sc</sup>3、M3・<sup>sc</sup>3、M3・<sup>sc</sup>4、M4・<sup>sc</sup>4、M5・<sup>sc</sup>4 (該当碑文数は各四、一二、二三、一七、六、五点)にほぼ集中していることがあきらかになった。

第三章では、これらの主要な文字組み合わせの編年が研究されている。

碑文の刻まれた岩壁の中には、幾度にもわたって碑文や岩絵が重ねて刻されている例が観察された。徳永君は、このような岩壁面で、前章で明らかにされた六つの組み合わせ、或いは組み合わせの構成要素となっているmと<sup>sc</sup>の文字を含む碑文がお

互いに、或いは古代南アラビア語文字と比較してどのような順序で刻まれているのかを考察した。また、同一岩壁面での刻文位置、砂岩の古色の度合いの観察も行った結果、南アラビア文字碑文がサムード文字碑文の後に記されている例が九件(逆の例はなし)、サムード文字碑文どうしでの刻文順序が明らかかな例が一七件確認された。その結果、mはM4、M5 ↓ M3、M1の順序で、<sup>sc</sup>は<sup>sc</sup>4 ↓ <sup>sc</sup>3 ↓ <sup>sc</sup>1の順序に出現したことが明らかとなった。また、サムード文字碑文が南アラビア文字の後に刻まれている例はなく、前一千年紀前半の古い書体を有するものでも、サムード文字の後に刻まれていた。これらは価値ある発見といえよう。

以上を踏まえると、六つの文字組み合わせの時間的順序はM4・<sup>sc</sup>4、M5・<sup>sc</sup>4 ↓ M3・<sup>sc</sup>4 ↓ M3・<sup>sc</sup>3 ↓ M1・<sup>sc</sup>3、M1・<sup>sc</sup>1となることが明らかとなった。そこで、これらの組み合わせを時系列に従ってIa (M4・<sup>sc</sup>4)、Ib (M5・<sup>sc</sup>4)、II (M3・<sup>sc</sup>4)、III (M3・<sup>sc</sup>3)、IVa (M1・<sup>sc</sup>3)、IVb (M1・<sup>sc</sup>1)と名づけた。新たな組み合わせの出現に当たっては、常に既存の組み合わせの一方の文字のみが変化し、双方が同時に変化することはない。更に、同一碑文内で複数のmが用いられている碑文の存在を考慮に入れると、ビル・ヒマー地域のサムード文字は外来の刻者集団によって変化したのではなく、幾度かの緩やかな段階的变化を経て発達したものとされる。これは重要な結論である。

第四章は、これらの文字を使って綴られたテキストの研究であり、各碑文の文法的特徴を摘出し、構文を研究するとともに、固有名詞の特質を明らかにしている。

ビル・ヒマー地域の注目すべき文法的特点是、不規則ながら南アラビア語の特徴である名詞の語尾変化・mを有していることである。これは北アラビアのサムード文字碑文とは大きく異なる点である。

碑文テキストの多くは、人名のみが単独で刻されているものであるが、w d d、w r b、w q rを含む特徴的な構文も存在する。w d dは北アラビア文字の諸碑文においても広く見られる言葉であるが、w r b、w q rを含む構文はビル・ヒマー地域のサムード文字碑文独特のものである。それぞれのテキスト、またw q rに関しては岩絵との関連についても考察した結果、w d dを含む構文は挨拶文で、w r bは断定はできないが、多分「友人」を意味し、w q rは「(彼は)刻した」を意味する言葉と解釈された。

また、ビル・ヒマー地域のサムード文字碑文に見られる人名は、明らかに北アラビア系と考えられるものを多く含んでいた。

第五章(結論)には、以上の研究によって明らかにされた所見がまとめられている。

ビル・ヒマー地域のサムード文字には多くのヴァリエーションが見られるが、少なくとも主要な文字に関して言えば、これらの違いは同地域独特の文字の段階的変化に起因するものである。このことは、これらの碑文テキストの研究からも裏付けられた。ビル・ヒマー地域の碑文は不規則ながらも、他の北アラビア文字碑文と異なる南アラビア語的特徴を有している。しかしながら、人名に関しては北アラビア系のもを多く含むため、これらの碑文の刻者が北アラビア系の人々であった可能

性も示唆される。

ビル・ヒマー地域のサムード文字碑文は、この地域で南アラビア文字が使用される以前から存在し、紀元後二から四世紀頃に姿を消す。その背景の一つには、ローマによる紅海の交易ルートの整備と一千年以上にわたって繁栄してきたアラビア半島西部を北上する陸上交易路の衰退が考えられる。徳永君はこうして、古代アラビア史の歴史認識に新たな寄与することができた。

最後に、本論文の内容や立場について若干の課題を挙げておく。第一は、扱われている碑文のほとんどが一語または二、三語からなる短いものであり、それが表現している内容は大多数が人名であることである。神名、動物名、家族名、職名などが表されていることは稀であり、羊の供犠というような宗教儀礼は例外的である。多少とも多いのは挨拶の言葉である。例外的に長いものはH M二五の碑文であるが、それはすでに欧米の研究者が目撃し、報告したものである。

第二の問題点は、徳永君が開発した方法には斬新なものがあるとはいえず、すでに十分な学問的積み重ねのある北西セム語研究等、比較言語学的議論があまり援用されていないことである。実際、異なる書体のmとwの相対年代についての議論はそれなりの説得力を持っているが、これらはまだサムード語書記法全体を理解する体系となっておらず、さらなる言語学的な深化が求められるであろう。(この点はすでに口頭諮問の段階で指摘があり、徳永君は最終的には弁明を加えて若干この問題にふれている)。

第三の問題点は、徳永君の貴重な成果をもってしても、サム

ード人の歴史や文化の解明にどこまで具体的に貢献できるのか、という疑問である。そのためにはより長期にわたる調査の継続が必要であろうし、他の文献史料や考古学的調査の成果も考えに入れる必要がある。

このような課題が残されているとはいえ、本論文は古代サムード人の碑文を新たに多数提示し、その革新的研究法を開発したものであり、その方法論と成果は国際的な水準に到達するものと言えよう。収集された資料とその分析もこれまでの欧米の碑文学研究を凌駕するものであり、古代アラビア史研究に新たな一ページをつけ加えたものと言えよう。従って、本論文は多くの点で高い評価を受けるべきであり、著者の徳永里砂君は文学博士の学位を取得するにふさわしいものと判定する。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 阿部 祥人

副査 慶應義塾大学文学部名誉教授 文学博士

小川 英雄

副査 サウード国王大学 (サウデイ・アラビア) 教授

Ph.D. アブド・ラフマン・アンサーリ

副査 慶應義塾大学文学部助教授 Ph.D. 杉本 智俊